

# イスラーム復興運動をどうとらえるか 近代化とグローバル化のはざままで

横浜市立東高等学校 智野豊彦

## はじめに

「イスラーム原理主義」・「イスラームテロ組織」などの言葉をいまだに報道で耳にする。多くの生徒が持っているイスラームに対するネガティブなイメージに、これらの用語を使用した報道等が大きな影響を与えていることは推測できる。本題に入る前に「イスラーム原理主義」について整理したい。原理主義は、もともとアメリカ合衆国のプロテスタントの一派をさす「ファンダメンタリズム」の訳語である。この言葉自体は自称ではなく、反抗的で時代錯誤的な神学を含意する蔑称である。キリスト教の一派をさし示す蔑称を、教義において一致しないイスラームに対して適用させ、明確な定義がないまま流布してしまっている。そして、「開明的」「近代」社会に対立する「武装過激派」「テロリスト」「頑固固陋な保守主義」のイスラーム教徒の行動を理解する言葉となっている。



『タペストリー』 p.278～279

このため生徒たちは、『タペストリー』\* p.278の図版「近現代のイスラームの動向」の様々な運動を一括して「原理主義」という枠組みで理解し、それぞれの歴史的経緯や相違などを無視しかねないのである。さらに、「原理主義」というラベルを貼ることによって、様々な対象をステレオタイプに還元させ、弾圧すべき単一の敵として認識してしまう。

\* 『最新世界史図説 タペストリー 七訂版』

このような偏見や誤解を克服し、生徒の公正な認識形成に果たす世界史授業の役割と責任は大きい。ここでは、「イスラーム原理主義」と重なる部分が多い「イスラーム復興運動」について、『タペストリー』を使った授業展開例を取り上げてみる。

## 1 西洋の衝撃の到来～伝統的価値の動揺と見直し

18世紀になるとイスラーム世界に対する西欧の脅威は大きなものとなってくる。イギリスの軍隊と戦争したスーダンのマフディー運動や、イランのタバコ=ボイコット運動など、生徒におさえさせたい項目は多い。その中で、「ワッハーブ運動」と「固き絆」がどのように、現代の復興運動とつながるかを理解させる。

### (1) ワッハーブ運動

「ワッハーブ派」は、外部からつけたラベルで、自称は「ムワッヒドゥーン」であり、12～13世紀にマラケシュを中心に栄えたムワッヒド朝と同じ名称である。ムワッヒド朝の創始者イブン=トゥマルトも、ムラービト朝のウラマーの見解を一神教に反すると攻撃した。この例でわかるように、「西洋の衝撃」以前にも一神論をめぐる改革運動はあり、ワッハーブ運動も預言者ムハンマドすら特権視しない徹底した一神教を追求したもので、西洋への対抗としてでてきたものとはいえない。そこで、イスラームの内部的改革運動としてのワッハーブ運動と、現在のイスラーム復興運動と共通している点を生徒に説明する必要がある。

ワッハーブ運動の創始者であるイブン=アブドゥル=ワッハーブは、13～14世紀のスナ派四正統法学派の一つであるハンバル派法学者のイブン=タイミーヤの思想に大きな影響を受けた。オスマン帝国の公式法学派であるハナフィー派では、

法学的問題は論じつくされたという説が主流になり、イスラーム世界に広く受け入れられていた。換言すれば、流動する現実に対して、伝統墨守的な保守の態度が広まっていたのである。それに対して、ハンバル派は、古典的な法学者のテキストよりもクルアーンとハディースという原典に立ち返ってシャリーアを再解釈する「革新的」な姿勢を持っていた。すなわち、ワッハーブ派は、徹底的な一神教を追求し、初期イスラーム共同体を理想化するサラフ志向を持つことによって、伝統墨守にとどまらず、新たなイスラーム解釈に寛容な姿勢をもつのである。

## (2) 『固き絆』～印刷物とイスラーム復興運動

伝統的なイスラーム教育は、教師と直接対話する形で学習を続けていた。各地の著名なウラマーを求めて旅を重ねる例は、イスラーム=ネットワークなどで取り上げるところである。

しかし、活版印刷技術の導入によって、印刷物によるイスラーム知識の浸透が拡

大するようになった。その代表例が、アフガーニーとムハンマド=アブドゥッフの『固き絆』である。この刊行と配布は、イスラームの運動に、印刷物が本格的に導入され国際的に多大な影響力を持つ契機になった。

師との面会のために旅を行う必要もなく、また数量的に限定された写本ではなく、大量出版物によってイスラームに関する情報に容易にアクセスできるのである。換言すれば、正統的・伝統的イスラーム教育を受けなくても、宗教書を読破することによって、独自のそしてときには過激なイスラーム解釈を行いやすくなった。さらに出版物を通してそれを伝達することによって一定数のムス

リムの支持を受ける。このような出版物を媒介とした新しい事態を生徒には理解させたい。

## 2 近代国家建設

～世俗政権からの弾圧と過激思想のめげえ

20世紀になるとイスラーム世界の大半は植民地になり、また西欧の進出を食い止めることができなくなった。さらにカリフ制も廃止され、イスラーム世界も、「近代」や西欧的価値に従属もしくは無視することができなくなった。世俗主義や民族主義などの西洋的な「近代的なもの」からの影響のうえに改革が行われるようになった。ここでは、イスラームの下に大衆を組織したムスリム同胞団の指導者たちが、近代的・西欧的な素養を持つ高学歴者であることを生徒におさえさせたい。

ワッハーブ運動は、急進的で革新的とはいえ、シャリーアを学んだウラマーを指導者として、伝統的イスラームの用語を用いて組織された。これに対して、ムスリム同胞団の創始者ハサン=バンナーは、国民国家形成に役割を果たす師範学校の出身者である。またバンナー暗殺後の指導者になったハサン=フダイビーも近代法を学んだ法律家であった。彼らは、シャリーアなど伝統的なイスラームを学んだウラマーではなく、西洋的な素養をもつ近代的人物である。民衆を大量動員したムスリム同胞団であるが、その中核となったメンバーは、高学歴・官僚・専門職などで、西洋近代的な価値観や生活様式にある程度共感を示すエフェンディと呼ばれる社会階層が多くを占めている。『固き絆』でとりあげたムハンマド=アブドゥッフは、近代西洋知識を身につけたウラマーとして、これの中間的存在として生徒に位置づけさせてもよいだろう。

## 3 「近代化」への不信と反発

～下からのイスラーム改革

第1次中東戦争をまじめに戦わなかったアラブ諸国の君主に対して、民族主義による革命が起こされ、第2次中東戦争の政治的勝利を勝ち得た。しかし、1967年の第3次中東戦争で大敗し、ナセ

### ② イスラームに基づく近代文明との調和



『タバストリー』p.278

ルに代表されるようなアラブ民族主義の権威は失墜した。この危機的状況がイスラーム覚醒を生じさせたといわれるほどの転機であったことをまずおさえさせる。また、この頃から、政治的闘争だけではなく、顎鬚を生やす男性や女性のヴェール着用など、イスラーム的と解釈される行動が顕在化してくる。ただし、ステレオタイプの誤解を植えつけることに終わらぬよう、ヴェールの形態や着用理由は様々であることを教師側は補足しなければならない。

ヒジュラ暦1400年直前の1979年は、イラン革命や聖モスク占拠事件が起き、戦闘的なイスラーム復興を印象づけた年である。とくに、この写真のように、黒いターバンと伝統的長衣を身に着けた指導者の存在は、イスラーム復興の時代錯誤的なイメージを強化した。



▲ ⑤イラン革命とホメイニ  
『タベストーリー』 p.36

しかし、革命の背景にパフレヴィー朝の人権を犠牲にした近代化政策があったことを理解させなくてはならない。また時代錯誤的なイメージのホメイニが、ラジオをかたわらに置いて国際ニュースに気を配る今日的なリーダーであったことも補足が必要であろう。

#### 4 グローバル化への疑念 ～精神のよりどころとしての信仰覚醒

東西冷戦終結と湾岸戦争は、イスラームの政治的運動の位置づけを変化させた。アフガニスタンでソ連と戦っていたオサマ=ビン=ラーディンやムジャーヒディーンと、これに対して援助していたアメリカとの関係は悪化する。さらに、湾岸戦争以後のメッカ・メディナの両聖地を有するサウジアラビアへのアメリカの軍事的プレゼンスは、イスラームへの無理解から摩擦を増加させていく。湾岸戦争の敵であるサダム=フセインを強大化させたのも、アメリカであったことにもふれたい。

イラク戦争でアメリカと戦ったアルカイダとタ

ーリバーンであるが、その違いを生徒に理解させる必要がある。アルカイダのオサマ=ビン=ラーディンは商学部、アイマン=ザワーヒリは医学部を卒業している。彼らは、イスラームという伝統を積極的に持ち出す世俗的教育を受けた近代主義者といえる。これに対してターリバーンは、もとはパキスタンのアフガニスタン難民のキャンプで成立したものである。難民の孤児たちは、家庭でのイスラーム教育もなく、高等教育を受けた者と違い、マドラサで学んだ以外の知識をもっていない。つまり、難民キャンプで学んだイスラームだけを身につけ、自己の思想を相対化する機会を持たない。これは、アフリカなどの少年兵と共通するものであり、難民問題というグローバル化の負の帰結の一つとして生徒に提示したい。

#### B 一部過激派の破壊活動



▲ ⑧パーミーヤーンの石仏像の破壊  
『タベストーリー』 p.279

#### おわりに

近代化が進めば世俗化が進み、生活における宗教色は薄くなり、政治に宗教が介入することは固く禁じられていく。それに対して、イスラーム世界では歴史の流れに逆行した「原理主義者」がいる。このような、単一的な近代史観の囚われから、生徒を自由にしなければいけない。近代化は様々な要素から構成されている複合的な現象である。複合されているものを分析し、理解することは決して容易ではない。イスラームを突出させた「文明の対立」的な諸事象の説明は、わかりやすい。しかし、ワンフレーズでわかる世界観ではなく、わからないものはわからないとして探求し続けることこそが、人間の尊厳であり喜びであることを、授業を通して生徒に提示していきたい。

おもな参考文献

『イスラーム主義とは何か』大塚和夫 岩波新書 2004年